日本文学の本文〈テキスト〉

二〇一一年十一月六日(日)十三～十六時

人文社会科学研究科棟二階マルチメディア会議室

日本文学における〈本文〉とは。

古代・中世・近世・近代を専門とする専任教員四人が、日本文学について、具体的なメディアとその特性を文学史的視座から論じます。

【古代】
兼岡理恵「今、ここにある「古代」―「かたち」・「よみ」の変遷― 」

私達が享受している「古代のテキスト」は、様々に変容しつつ現代に伝えられてきたものです。
本講義では千年以上前に書かれたテキストが辿ってきた「かたち」・「よみ」の諸相を繙きつつ、古代のテキストを「よむ」という営為を考えます。
扱う本文：『古事記』

【中世】
柴佳世乃「説話とその語られた場―本文の変容― 」

中世は「説話の時代」と言われ、多くの説話集が編まれました。
説話集に書き留められた一編の話が、どのような場で読まれ、いかに活用されたかを具体的に取り上げ、中世説話をめぐる「現場」を覗いてみたいと思います。
扱う本文：鴨長明『発心集』の一話（堀河天皇を慕う男が主上亡き後、西海に船出する話）

【近世】
高木元「文学の大衆化―出板文化史の視座から― 」

近世は「出板の時代」と呼ばれ大量の大衆小説が〈絵入本〉として流布しました。
製版本は本文と絵画の融合に相応しいメディアであり、これら画と文とが不可分な美しい装丁の本はそれ自体を本文として捉えることが可能なのです。
扱う本文：曲亭馬琴『南総里見八犬伝』

【近代】
大原祐治「書物のあとさき―検閲と本文の変容― 」

近代文学を読むとき、「本文」は唯一絶対のものであると考えられがちです。
しかし作家の肉筆の文字が活字に組まれ版を重ねる、また検閲の強制的な力で「本文」は複数化、その変化は文学作品を内容から鑑賞する場合には見えてこない問題を考える端緒となります。
扱う本文：大岡昇平『俘虜記』

千葉大学公開講座
(聴講無料・来聴歓迎)

主催：千葉大学文学部
企画：日本文化学科（日本言語文化論講座）
共催：千葉大学大学院人文社会科学研究科
後援：千葉市教育委員会

Chiba University

フェスタ 国立大学2011 JANU

問合せ先：千葉大学文学部学務グループ　043-290-2352